

迷子

泉鏡花

青空文庫

お孝かうが買物かひものに出掛でかける道みちだ。中里町なかぎとまちから寺町てらまちへ行ゆかうと

する突つきあたり當かうばんの交番ひとに人ひとだかりがして居ゐるので通とほりす過ぎてから
こもどり
小戾こもどりをして、立停たちどまつて、少すこし離はなれた處ところで振返ふりかへつて見みた。

ちやうど今雨いまあめが晴はれたんだけれど、蛇じやの目めの傘かさを半はん開びらにし

て、うつくしい顔かほをかくして立たつて居ゐる。足駄あしだの緒をが少すこし弛ゆるんで

居ゐるので、足許あしもとを氣きにして、踏揃ふみそろへて、袖そでの下したへ風呂敷ふうしきを入い

れて、胸むねをおさへて、顔かほだけ振向ふりむけて見みて居ゐるので。大方おほかた女の

身みでそんなもの見みるのが氣恥きはづかしいのであらう。

ことの起原おこりといふのは、醉漢ゑひどれでも、喧嘩けんくわでもない、意趣いしゆぎ

斬りでも、竊盜せつたうでも、掏賊すりでもない。六ツむつばかりの可愛かはいいのが

迷兒まひごになつた。

「母様おつかさんは何うした、うむ、母様おつかさんは、母様おつかさんは。」と、

見張員みはりあんが口早くちばやに尋ね出したたづ。なきじやくりをしいしい、

「内うちに居るよ。」

巡查じゆんさは交番かうばんの戸とに凭懸よりかつて、

「お前まへ一人ひとりで來たのか、うむ、一人ひとりなんか。」

頷うなづいた。仰向あふむいて頷うなづいた。其膝切そのひざきりしかないものが、突立つ立たつて

る大だいの男をとこの顔かほを見上みあげるのだもの。仰向あふむいて見みざるを得えないので、

然しかも、一寸位ちよつとぐらゐでは眼めが届とどかない。頤おとがひをすくつて、身みを反そらして、

ふツさりとする髪かみが帯おびの結目むすびめに觸さるまで、いたいけな顔かほを仰向あふむ

けた。色いろの白しろい、うつくしい兒こだけれど、左右さいうとも眼めを煩わづらつて居ゐ

る。細くあいた、瞳が赤くなつて、泣いたので睫毛が濡れてて、まばゆさうな、その容子ツたらない、可憐なんで、お孝は近づいた。

「一いつたいどこ何處の兒でございませう。方角も何も分らなくなつたんだよ。仕様がないうことね、ねえ、お前さん。」

と長屋ものがいひ出すと、すぐ應じて、

「ちつとも此邊ぢやあ見掛けない兒ですからね、だつて、さう遠方から來るわけはなしさ、誰方か御存じぢやありませんか。」
 誰も知つたものは居ないらしい。

「え、お前、巾着でも着けてありやしないのかね。」
 と一人が踞つて、小さいのが腰を探つたがない。ぼろを着て居

る、汚きたない衣服きもので、眼垢めあかを、アノせつせと拭ふくらしい、兩方りやうほうの袖そでがひかつてゐた。

「仕様しやうがないのね、何なんにもありやしないんですよ。」

傍そばに居ゐた肥ふとつたかみさんが大おほきな聲こゑで、

「馬鹿ばかにしてるよ、こんな兒こにお前まへさん、札ふだをつけとかないつて奴やつがあるもんか。うつかりだよ、眞個ほんたうにさ。」

とがむしやらかなものいひで、叱しかりつけたから吃驚びつくりして、わつといつて泣なき出だした。何なにも叱しかりつけなくツたつてよささうなものだけれど、蓋けだし敢あへてこの兒こを叱しかつたのではない。可愛かはいさの餘あまり其その不注意ふちういなこの兒この親おやが、恐おそろしくかみさんの癩しやくにさはつたのだ。

「泣なくなよ、困こまつたもんだ。泣なくなつたら、可いいか、泣ないたつて

仕様がな^{しやう}い。

また一層聲をあげて泣き出した。

中に居た休息員は帳簿を閉ぢて、筆を片手に持ったまゝで、戸をあけて、

「何處か其處等へ連れて行つて見たらば何うだね。」

「まあ、もうちつと斯うやつとかう、いまに尋ねに來ようと思ふから。」

「それも左様か。おい、泣かんでも可い、泣かないで、大人しくして居るとな、直ぐ母様が連れに來るんぢや。」

またアノ可愛いふりをして、頷いて、其まゝ泣きやんで、ベソを搔いて居る。

風が吹くたびに、糖雨を吹きつけて、ぞつとするほど寒い

ので、がた／＼ふるへるのを見ると、お孝は堪らなかつた。

彌次馬なんぎ、こんな不景氣な、張合のない處には寄着は

しないので、むらがつてるものの多くは皆このあたりの廣場でも

つて、びし／＼雨だから凧を引摺つてた小兒等で。泣くのがお

もしろいから「やい、泣いてらい！」なんて、景氣のいゝことを

いつて見物して居る。

子守がまた澤山寄つて居た。其中に年嵩な、上品な

のがお守をして六つばかりの女の兒が着附萬端姫様といはれ

る格で一人居た。その飼犬ではないらしいが、毛色の好い、耳

の垂れた、すらつとしたのが、のつそり、うしろについてたが、

皆で、がやく／＼いつて、迷兒にかゝりあつて、うつかりしてる隙に、房さりと結んでさげた其姫様の帯を銜へたり、八ツ口をなめたりして、落着いた風でじやれてゐるのを、附添が、つと見つけて、びツくりして、叱！ といつて追ひやつた。其は可い、其は可いけれど、犬だ。

悠々と迷兒のうしろへいつて、震へて居るものを、肩の處へろりとなめた。のはうづに大きな犬なので、前足を突張つて立つたから、脊は小ぼけな、いぢけた、寒がりの、ぼろツ兒より高いので、いゝ氣になつて、垢染みた襟の處を赤い舌の長いので、ぺろりとなめて、分つたやうな、心得てゐるやうな顔で、澄した風で、も一つやつた。

迷兒まひごは悲かなさが充い滿っぱいなので、そんなことには氣きが付きやしないんだらう、巡じゆん査さにすかさされて、泣ないちやあ母おつか様さんが來きてくれないのとはかり思おもひ込こんだので、無む理りに堪こへてうしろを振ふり返かへつて見みようといふ元げん氣きもないが、むずくするので考かんへるやうに、小首こくびをふつて、促うなながとこころ、促せす處ところある如ごとく、はれぼつたい眼めで、巡じゆん査さを見み上げた。

犬いぬはまたなめた。其その舌したの鹽あん梅ばいといつたらない、いやにべろくして頗すこぶぶるをかしいので、見物けんぶつが一いっ齊せいに笑わらつた。巡じゆん査さも苦にが笑わらをして、

「おい。」とさういつた。

お孝かうは堪たまらなかつた。かはいさうでくかはいさうでならない

のを、他に多勢見て居るものを、女の身で、とさう思つて、うつちやつては行きたくなし、さればツて見ても居られず、ほんどに何うしようかと思つて、はツくしたんだから、此時もう堪らなくなつたんだ。

いきなり前へ出て、顔を赤くして、

「私が、あの、さがしますから。」

と、口の中でいふとすぐ抱いた。下駄の泥が帯にべつたりとついたのも構はないで、抱きあげて、引占めると、肩の處へかじりついた。

ぐるツと取巻かれて恥しいので、アタフタし、駈け出した位位急足で踏出すと、おもいもの抱いた上に、落着かないからな

りふりを失つた。

穿物の緒が弛んで居たので踏返してばつたり横に轉ぶと姿

が亂れる。

皆で哄と笑つた。お孝は泣き出した。

明治三十年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※表題は底本では、「迷子《まひご》」となっています。

※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年4月24日作成

2016年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

迷子

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>